

子ども参加における関係性の質的发展について

田代高章*

(1999年10月29日受理)

はじめに

今日、子どもの権利论の発展とも相まって、子どもの権利としての「参加」をいかに保障していくかが現代的な理論的・実践的課題の一つとして共通に認識されつつある。権利としての「参加」は、わかる授業・たのしい授業を求めての授業への子どもの主体的・能動的な参加、授業づくりへの教師と子どもの共同的な参加、学校運営への関与・決定への親や教師も含めた子どもの自治的な参加などで示される、具体的な「子ども参加」の実践を実現するための、重要な機能概念である。

もっとも、権利としての「参加」の保障といっても、単に何らかの活動や決定に子どもを参加させるだけ、すなわち、子どもが参加できる場を単に準備するのみでは、子どもは自分の参加についての自覚と自信と責任に基づき意見表明をなし、何らかの問題解決に際して、他者との共同決定を担い得るだけの実質的な参加には変わりえない。つまり、形式的な参加では、現実には子どもは変わらないのである。

近年、子どもの権利の側面からも子どものエンパワーメントが注目されてきている。子どものエンパワーメントとは、子どもたちがその内面に潜在的に備わる創造的な可能性に対する信頼の獲得に支えられながら、自分たちに関わる生活を自己決定し、創造的な社会を形成する担い手としての実感を有していくプロセスであるといえる。そして、「子ども参加」の目的が子どものエンパワーメントと規定される¹⁾。それは、参加の過程で、「大人と子ども」「子どもと子ども」の関係の中で、子どもたち自身が「自分たちをどう認識するか」という認識の質が変わり、その結果として、子どもたちの行動や発言が変わっていくことを指している。このことが「参加」を通してのエンパワーメントといえる。

つまり、子どもは参加のプロセスを通じて、そこでの大人や他の子どもたちとの関わりの中で自らも変化していくということを意味する。

そのことから、参加のプロセスにおける「子どもと大人」「子どもと子ども」の関係のあり方、すなわち、関係の質こそが、子どものエンパワーメントへ向けて子どもを変えていく重要な基本条件となるのである。

ここに、子どもの参加を形式的な参加から、子どものエンパワーメントに資する「真の」参加へと高めていくために、「関係性の質」を問わなければならない理由が存在するのである。

本論文では、子どものエンパワーメントという観点から提起された、Mary Johnの「参加の

* 岩手大学教育学部

橋づくり」モデルを取り上げながら、「子ども参加」における関係性の質的发展について考察したい。

1 Roger Hart の「参加の階梯」モデルの問題点

Roger Hart は、子どもの発達を基軸としながら、8つの参加の段階を論じている。コミュニティにおける子ども参加の文脈から論じられたものであるが、各段階毎に、「大人と子どもの関係」のあり方を、具体的ケースを紹介しながら示している²⁾。Roger Hart のモデルは、参加の現実の状態が、非参加（擬似的参加）か、それとも真の参加にあるのかどうか、また参加のグレードがどの程度のものであるかを説明する有効な枠組みであるとともに、子どもの参加が真の参加というために、どのような参加のあり方が必要であるかを大人と子どもが意識化するためにも有効な枠組みとして機能する。

しかし一方で、Roger Hart のモデルについては、「階梯（はしご）」という比喩的発想自体が父権社会的な伝統的観念を強化する危険があるとも指摘されている³⁾。つまり、階梯は、弱者に対して、支配的な多数派の世界へと登るために救いの手を差し伸べるということを意味するものと理解されてしまうのである。とりわけ、参加の目的がエンパワーメントであるならば、力のある者によって力のない者へ権利が供与されるというモデルではなく、権利上の弱者としての子どもたち自身が自らの力を変容させていくというプロセスを明示するダイナミックなモデルが必要となってくる⁴⁾。

その点を指摘して、エンパワーメントの視点から、「大人と子ども」「子どもと子ども」の関係のあり方を中心にした参加のプロセスを論じたのが Mary John の「参加の橋づくり」モデルである。

つまり、Mary John は、Hart のモデル自体の意義を否定するものではないが、Hart のモデルでは、子ども参加における、「子どもと大人」「子どもと子ども」の関係のあり方が、「参加の質」を左右し、ひいては、この「関係性の質的变化」が「参加の質」の変化を引き起こすという、子どものエンパワーメントの視点が弱いというのである。

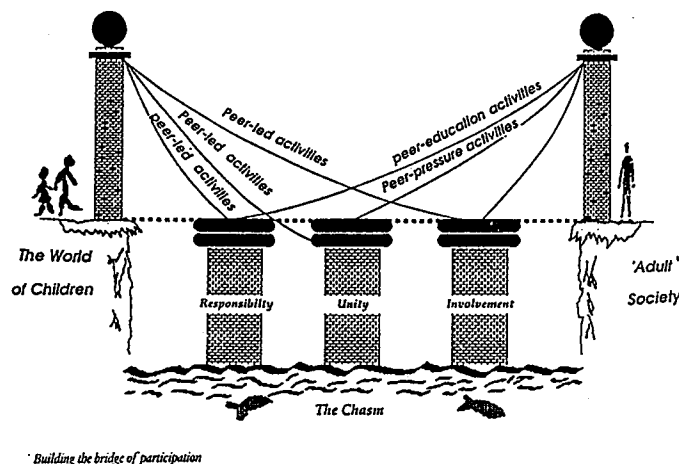
2 Mary John の「参加の橋づくり」モデルにおける3つの基本概念と3つの活動

Mary John が提起する「参加の橋づくり」モデルは、次のように示される（図1参照⁵⁾。このモデルは、子どもの世界と大人の社会に間に、深い溝が横たわっていることを含意しつつ、参加を通じた両者のパートナーシップ形成のための関係の発展を説明するための枠組みである⁶⁾。

参加の意義それ自体は、民主社会の形成と個々人の市民性の形成の二点として把握される。前者は、参加によってこそ民主社会は成立するという前提の下、子どもも社会の一員として可能な限り参加することが要請されることを意味し、後者は、子どもと大人がともに権利主体としてパートナーシップの関係を築くことの必要性を意味している。

ただし、Mary John は、子どもと大人のパートナーシップの関係は所与の前提として存在するものではなく、子どもと大人、および同輩としての（性別・年齢を問わず）子どもと子どもの関わりある活動を通じて構築されていくものと考えている。

図1 Mary John の「参加の橋づくり」



そのような活動を通じて、権利上の弱者集団 (minority rights group) としての子ども集団に、「責任 (responsibility)」がめばえ、「団結 (unity)」が生じ、最終的に、大人とのパートナーシップのもとに、子どもたちの生活に関わる問題に関して、子どもと大人が、ともに協力的 (co-operative)・共同的 (collaborative) かつ、協議的 (negotiative) な関係で、様々な問題の解決に「参入 (involvement)」していくのである。そのそれぞれの「責任 (responsibility)」、「団結 (unity)」、「参入 (involvement)」を橋の支柱に見立てて、子どもと大人の活動を通じた3つの支柱の構築によって、子どもの世界と大人の社会との橋渡しが完成し、子どもと大人のパートナーシップが構築されるとするのである。

この三つの支柱としての、「責任 (responsibility)」、「団結 (unity)」、「参入 (involvement)」は、黒人の地位向上というエンパワーメント実現のための黒人の意識変容のプロセスを説明した Steve Biko の考え方⁷⁾に依拠して、Mary John が展開したものである。

子どもたちの世界と大人の社会とをつなぐ橋づくりにおける重要な要素である、三つの支柱と子どもと大人の活動の形態について、それぞれ以下に簡潔にまとめておく。

(1) 橋の3つの支柱

- 1) 責任 (responsibility) — 子どもたちの集団が、大人との関わりにおいて自らの責任を自覚するレベル
- 2) 団結 (unity) — 子どもたちの集団が、自律的な集団として、その責任の下に、大人と関わっていくレベル
- 3) 参入 (involvement) — 子どもたちの集団が、大人との関係でパートナーシップに基づき、共同して諸問題に取り組むレベル

上記の3つの支柱は、子ども集団 (peer-group) の質の変化を示している。

つまり、大人社会と子どもの世界を橋渡しし、双方のパートナーシップを確立するために、次に掲げる子どもと大人との間に交わされる3つの活動を通して、子ども集団が自らの置かれた状況の中で「責任」を自覚し、さらに集団としての「団結」を深め、その結果として、社会における諸問題に関して、子ども集団が自分たちの立場として大人と一緒に問題に取り組むという「参入」に至るのである。

(2) 3つの活動

1) 子どもたちの主導的活動 (peer-led activities)

→子どもたちの中のリーダーが中心となって、他の子どもたちに働きかける活動。

2) 子どもたちを教育する活動 (peer-education activities)

→大人の教育(指導)を受けた子どもが他の子どもたちに教え合う前提として、大人が子どもたちを教育(指導)する活動。

3) 子どもたちに圧力をかける活動 (peer-pressure activities)

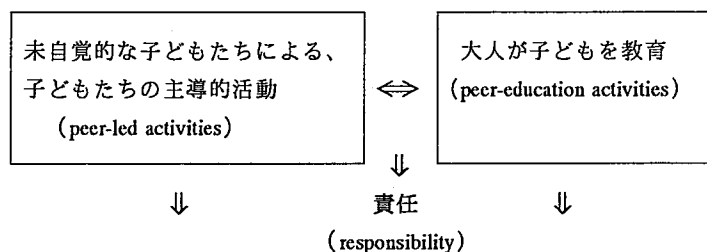
→大人が子どもに対して、子どもたち自身が問題を考え解決することを促すとともに、様々な問題に対して子どもたち自身が説得的に働きかける活動。

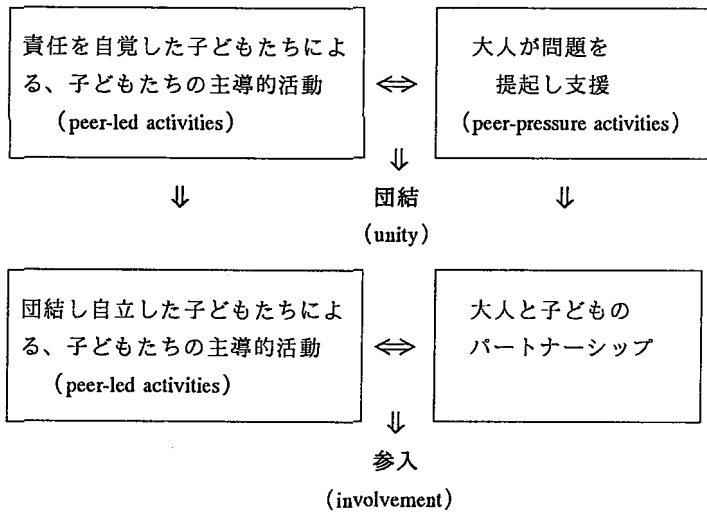
支柱との関係でいえば、支柱を作るという営みそれ自体が、参加の一步一步の前進を意味し、3つの支柱が完成し、橋が出来上がったときに、子どもと大人の関係性におけるパートナーシップが確立される。具体的に言えば、1) 2) の活動が相互に行われることで、子どもたちの中に「責任」が芽生え、3) を受けて1) の活動が活性化していくことを通じて、子どもたちの「団結」が強まっていく。そして、子どもたちが自律した形で大人と一緒に共同で社会上・学校上・生活上の諸問題に取り組むという場合、すなわち、「参入」に至る。この最後の場合には、もはや大人の側からの活動は展開されないが、それは、子どもと大人のパートナーシップが確立される「参入」というレベルから言えば、当然のこととなる。

3 「参加の橋づくり」モデルから見た、子ども参加における関係性の発展

Mary John の「参加の橋づくり」モデルから、子ども参加における関係性の質的発展を図式化すると、次のようにとらえることができる(図2参照)。

図2 関係の質的発展





4 「参加の橋づくり」の実践例としての「スロベニア子ども議会」の活動

上記の、「参加の橋づくり」モデルについて、Mary John は、スロベニアの子ども議会の例が、その事象をうまく説明できるとする⁸⁾。

そこで、まず、スロベニアの子ども議会の様子を報告している、Zoran Pavlovic の論に依拠しながら、子ども議会の様子を以下にまとめる⁹⁾。

スロベニアの子ども議会は、1990年に、スロベニア青少年友好協会 (AFYS) が中心となって発足した。子ども議会発足に当たっては、子どもは公的問題に関して意見を述べる権利を有しているとの AFYS の信念に依拠するところ大であった。

第1回の議会は、1990年10月19日に開かれた。その際、スロベニア全65自治体のうち44の自治体を代表する、105人の子どもたち (主に13歳から15歳を中心とする) が、大人の役職者たち (議会の長、総理大臣、教育大臣、社会問題担当大臣、政党の議員など) と討論すべく集まった。討論のテーマについては、子どもたちの身の回りの問題に関わって設定された。

第1回の議会のテーマは、「環境」であり、1993年までの議会のテーマと主な討議内容は以下の通りである。

第1回 (1990年) : 「環境 (Environment)」

→子どもにとっての健康と安全な環境について、生態環境のみならず、生活環境としてスロベニアの子どもたちにとって切実である道路交通の危険が討論の対象とされ、現実の状態に対して大人が徹底的に非難された。

第2回 (1992年*) : 「余暇 (Leisure Time)」 (*独立を巡る戦争の影響で遅れて年明け早々に開催)

→子どもたちが、余暇・自由時間を過ごす場合の障害がテーマとされ、その対象として学校のあり方が批判の対象とされた。そこでは、教科外活動の切り捨て、体育館やプールなどの体育施設の少なさ、現存する施設の劣悪な状態に対して、その改善が論

じられた。

第3回(1992年):「友好的な学校(Friendly School)」

→子どもたちにとって親しみの持てる友好的な学校というテーマで、学校での人間関係、物質的水準、カリキュラムの質が討論された。その際、単なる不満ではなく、事実問題として改善可能な対案が出された。(教育内容の現代化としてのコンピュータの配置、合理的なカリキュラムと教育方法—例えば、フィールドワーク的な学習、など)

第4回(1993年):「暴力のない友好(For Friendship Without Violence)」

→学校自体が友好的で友情に満ちたものとして存在する上で、暴力のないことが必要条件であるとして、上記のテーマで討論された。特に、いじめの問題が取り上げられたが、この問題は、子ども集団の自治的解決にとっては困難な課題を抱えているため(いじめを告発することによる仲間外し、仲間の裏切りなど)、子どもの側からの積極的な大人(教師、カウンセラー)の側への協力が求められた。そこでは、教師だけではなく、親、地域の協力者などが子どもたちと協力し共同して問題に取り組むことが、子どもからも大人からも共通認識として提起された。

その際、大人社会に見られる、暴力、飲酒、喫煙、薬物濫用、暴力映画・メディアといった悪しき文化の影響が子どもたちによって非難された。大人社会の反映としての学校でのいじめの解決は、大人の側の協力なくして実現し得ないことが、子どもの提案によって大人側の反省を求める形で提起され、大人社会自体を子どもと共に改善していくことの見通しが話し合われた。

Zoran Pavlovicによれば¹⁰⁾、子ども議会の第1回では、会議を組織した大人側の熱意は多大であったが、子どもたち自身はまだ自分たちの意見の主張が大人側に受け入れられるかについては、消極的にしか受け止めていなかったという。しかし、第2回目の会議の前に、第1回の会議の結果が報告書としてまとめられたが、大人として環境の改善に努力すべき具体的な提示が見られないとして、その点の批判が第2回目の会議で主張された。そのため、第2回目の会議では、大人の出席者たちは、子どもたちの意見を採用入れ、現実の努力を試みることに約束された。子どもたちは、ようやく自分たちの意見が受け容れられ、大人社会を動かすことに成功したことに満足した。

この2回の会議を通じて、大人たちも変化し、大人と子どもの対話の可能性が確信へと変化している。子どもたちの要求から、子どもは大人の援助が必要であることを大人側も意識し始め、子ども会議での子どもの要求の実現に向けて本格的に動き始める。

第3回目の会議では、子どもたちも大人側の対応に不満足な場合でさえ、大人側を受け入れ、大人を批判するだけではなく、現実的観点から大人と一緒に協力して諸問題(特に学校の問題)の解決に向けて話し合うように、子どもたち自身の変化がみられた。子どもたちは単に不満を言うのではなく、学校を改善するための自分たちの役割を果たす義務を積極的に認め、改善の対案を自発的に考えるようになっていた。特に子ども代表の集団は、代表母体である自分たちの学校での議論を十分反映させ、それらを子ども代表の中での十分な討論を踏まえて、自治的

な集団としての提案を出すようになっていた。

また、大人側も、子どもたちの要求を真剣に受け止め、特に学校の問題に関しては、学校での良き指導者（教師や学校カウンセラーなど）の育成のための研修の充実に着手していた。

これらの議会の基本メッセージを、Zoran Pavlovic は次のようにまとめる¹¹⁾。

第1回：「我々は未来が欲しい」

第2回：「我々の面倒を見よ」

第3回：「我々は自分たちの役割を果たすことができる」

第4回：「大人たちよ、変われ！」

これらのメッセージは、次のような意味として理解できよう。

第1回：責任と見通しのない単なる要求

第2回：要求の実現可能性を見通した上での要求

第3回：自分たちの責任と役割を自覚した上での自分たちの意思統一としての要求

第4回：大人とのパートナーシップ意識の芽生えに基づく大人側への要求

Mary John によれば¹²⁾、これらの子ども側の変化はまさに、「責任」の自覚と、子ども集団としての「団結」の強まりを示すものであり、大人側の子どもの対する見方の変化と、現実の問題の改善に向けて子どもたちと協力・共同して取り組むという現実の対応の変化は、子どもと大人のパートナーシップ形成の端緒であると評価している。スロベニアの子ども議会の進展は、「参加の橋づくり」のモデルとして考えられるとする。

このようなスロベニアの子ども議会の様子から、参加の質的发展における子ども議会の意義を探るとすれば、以下の点にあるといえよう。

①子どもたちの変容（議会活動）に対する大人の役割の重要性

②子どもと大人のパートナーシップ確立の重要性

③子どものエンパワーメントとしての「子ども議会」活動

このような子ども議会は、わが国においても、いくつかの形態が見られる¹³⁾。その中には、大人側の意識の問題として、果たして子どもとの十分な対話に基づくパートナーシップの形成を本当に目指そうとしているのかについては、十分に検証してみる必要がある。

おわりに

Mary John の「参加の橋づくり」モデルから、子どもの権利としての参加の実現のために必要な視点は、次のようにまとめることができる。

(1) 子どもと大人の関係は、それぞれの立場・世代の差や主張を異にしながらも、「参加」の過程では、共同的・協議的 (collaborative and negotiative) な要素を基盤とする主体－主体関係であり、「参加の橋づくり」モデルからうかがえるように、パートナーシップ構築を意識したコミュニケーション的関係の質的发展ととらえることである¹⁴⁾。

つまり、子どもは未熟な存在として出発し、大人と関わりながら一步一步大人へと成長を遂げていく存在であるものの、子どもと大人は人間存在としては主体と主体であるという特質から、子どもは大人とのコミュニケーション的關係を通じて、保護されつつ自立していくという

発展関係としてとらえられるということである。

(2) 「参加」をあくまで、大人たちとの共同を前提にした、子どもたちの主体的・積極的活動としてとらえることである¹⁵⁾。

(3) 「参加」のプロセスにおける関係について、大人と子どもの関係以上に、同輩集団 (peer group) としての、子ども相互の関係性が重視されるということである¹⁶⁾。そこでは、異年齢の子ども相互の関わりが、相互に教え合い助け合うという、自治的・共同的关系に転化していくことが求められるのである。

(4) 「参加」のプロセスにおける子どもの変容は、「参加の質」の発展と不可分であるだけでなく、子どもの「自己 (self)」形成および「自律性 (autonomy)」の形成を実現するということである¹⁷⁾。つまり、他者との関わりの中で、自分自身が社会的存在として成長発展していくという、参加の過程での共同としての自治と個々人の自立とが統一的に実現されるのである。

(5) 「子ども参加」の目的を子どものエンパワーメントとしてとらえることである。

つまり、「子ども参加」は、子どもと大人の関係の中で権限を大人から子どもへ付与することを意味するのではなく、子どもと大人の関係性それ自体の変容ととらえるべきものであり¹⁸⁾、その中で子どもたちは自らに対する自信と社会を形成しうる能力を獲得していくのである。

Mary John のモデルは、関係性それ自体の質的發展を問題とする一方、子どもの発達と相対的に独立したモデルであるがゆえに、子どもの発達のレベルに応じた発展をいかに考えるかという点、および、学校教育における具体的実践のレベルでの実例を示し得ていない点では限界を有するともいえる。しかしながら、「参加の橋づくり」モデルは、最後にまとめた5つの視点から理解できるように、「子ども参加」のさらなる実現にとって、「大人」と子どもの関係のあり方、子ども相互の関わり方を考える上で、一つの思考枠組みとして貴重な示唆を与えてくれるであろう。

注

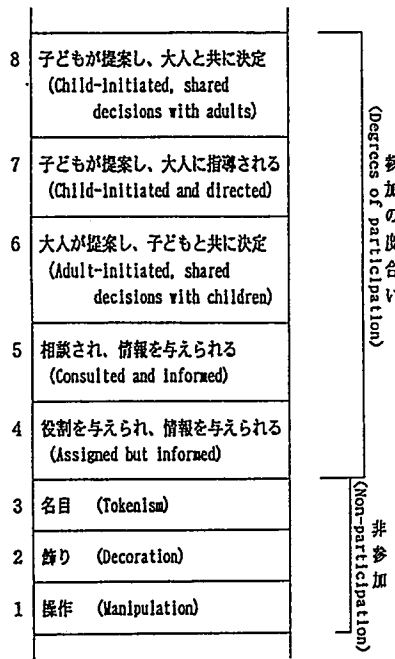
1) エンパワーメントと子どもの権利および子どもの参加との関連については、拙論「子どもの権利とエンパワーメント」(日本生活指導学会編『生活指導研究16』エイデル研究所, 1999年)を参照。

2) Roger Hart "Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care." Earthscan, 1997.

Hartの参加階梯モデルは図3のような、階梯(はしご)状の構造図として図式化されている。

なお、Hartの参加階梯モデルの分析については、拙論「子どもの『参加論』に関する一考察—R. Hartの参加論を中心に—」(中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第41巻, 第1部, 271-276頁。)を参照のこと。

図3 Roger Hart の「参加の階梯」



(Hart, R.A. 'Children's Participation', p.41
に依拠して作成)

- 3) Mary John, Voicing: Research and Practice with the 'Silenced'. In: Mary John (ed.) "Children in Charge: The Child's Right to a Fair Hearing." Jessica Kingsley, 1996, p. 15.
- 4) Ibid., p. 16.
- 5) Ibid., p. 20.
- 6) Ibid., pp. 15-21.
- 7) Aelred Stubbs, C.R. (ed.) "Steve Biko. I Write What I Like. A Selection of his Writings." Harmondsworth, Penguin, 1988. Steve Biko 自身は、「Black Responsibility」「Unity」「People's Movement」という概念を用いている。
- 8) この他の例として、Mary John はイギリスの、Devon Youth Council の例も紹介している。これは主に、青少年の同輩集団としての「責任」の自覚の変容と「団結」についての Devon Youth Council の役割を評価したものである。
Penny Townsend, Too Many Rights Don't Make a Wrong: The Work of the Devon Youth Council. In: Mary John (ed.) "Children in Charge: The Child's Right to a Fair Hearing." Jessica Kingsley, 1996.
- 9) Zoran Pavlovic, Children's Parliament in Slovenia. In: Mary John (ed.) "Children in Charge: The Child's Right to a Fair Hearing." Jessica Kingsley, 1996.
- 10) Ibid., pp. 96-105.
- 11) Ibid., p. 106.
- 12) Mary John, Voicing. op. cit., p. 17.
- 13) わが国における「子ども議会」の例としては、まず国レベルでは、①参議院 50 周年記念行

事「子ども国会」(1997年7月29・30日)。県レベルで、②「みやぎ子ども会議」(1996年8月開催、以後98年まで)、③「福岡県子ども会議」(1998年以降)、市レベルで、④「川崎子ども会議」(1994年10月開催)などがみられる。

- 14) Mary John, *Voicing*. op. cit., p. 21.
- 15) *Ibid.*, p. 21.
- 16) Mary John, 'Children with special needs as the casualties of a free market culture.' *The International Journal of Children's Rights* 1, 1993, p. 18.
- 17) *Ibid.*, p. 19.
- 18) Mary John, *Voicing: Research and Practice with the 'Silenced'*. op. cit., p. 13.